

それぞれ6ヶ月間、東京大学（三鷹、岡山、木曾、教養）あるいは京都大学に滞在し、そこでそれぞれ専門分野の観測関係の技術を吸収した。また、多くの日本の天体観測所を訪れ、近代的な観測技術についての見聞をひろめたことも大きな成果である。

一方、日本からは、JICAの「専門家派遣」制度によって、大谷が1984年にコタミアに2ヶ月滞在し、イメージ・インテンシファイアを用いた銀河の測光などをエジプトの研究者と共同で実施し、また、翌年には、北村と清水実氏が、188cm望遠鏡の総合診断と、今後の交流についての総括的検討をおこなった。

これにもとづいて、ヘルワン側からJICAに対して、日本への研修員の受入れと、日本からの観測（技術）者の派遣の要請が出されている。筆者たちは、この程度の交流をさし当って5年間ぐらい積重ねることが適当であると考えている。また、これと併行して、光電測光装置のヘルワンへの供与もエジプトからJICAに申請されている。

このように、エジプトとは観測技術面での交流が主になっているが、研究交流もこれに付随して必然的にはじまりつつある。変光星、星間気体、系外銀河などがコタミアでの研究分野である。さらに、JICAのチャンネル以外でも、山崎篤磨氏と高瀬文志郎氏が1978年と1984年にそれぞれヘルワン天文台やカイロ大学を訪問し、学問的な交流を深められた。他方、ヘルワンからも、日本の大学への留学や客員研究員の申請も出ている。

ところで、コタミアの188cm望遠鏡は、この10年間、英国がアイザック・ニュートン望遠鏡（口径254cm）を本国からカナリー諸島へ移転するあいだの観測時間の不足を補う（年間50夜～100夜）という国際的

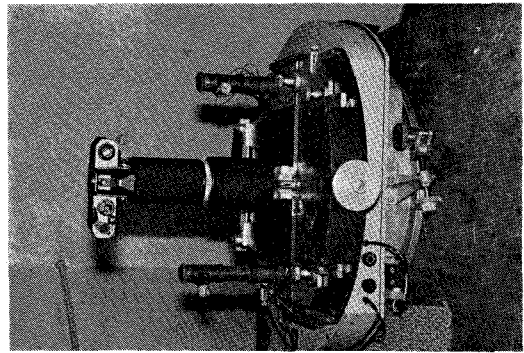


写真2 直接撮像用のイメージ・インテンシファイア・カメラ——188cm望遠鏡のニュートン焦点にとりつけられた。写真の右側が望遠鏡との接合側となる。35mmカメラにかえて、乾板密着撮影ホルダーもとりつけ可能である。資金はJICAの援助による。

な大役も果してきた。（本誌72巻8号の山崎篤磨氏の稿を参照）このことは、コタミアの望遠鏡を良好な状態に保持することにも役立ってきたといえよう。しかし、この役割（英国・エジプト間協定）も今年いっぱいでは終了する。

現在、世界中で、かなり潤沢なマシンタイムを確保できる2メートル級の望遠鏡として、エジプトの望遠鏡は貴重な存在ではないかと考える。この188cm望遠鏡を、単に物理的だけではなく、内容的にも日本の姉妹望遠鏡として、両国の研究者が活用できるように、装置と観測技術の近代化に役立てばと思っている。今後とも、日本の天文関係者の御協力をおねがいするとともに、日本カイロ大使館、JICAの本部およびカイロ事務所のこれまでのご努力に感謝し、ようやく緒についたこの技術協力に、いっそうの支援を望むものである。

学会だより

近刊予告

日本天文学会編、ハレー彗星回帰記録「ハレー彗星をとらえた」が近く出版されます。

今春の年會々場において開催した「ハレー彗星写真展」に出品された写真等の中から200点ほどを選び、ハレー彗星の今回の回帰を展望できるようにしました。ひとつひとつでは不明だったことが日を追って並べてみるとわかってきます。彗星が太陽に近づいて尾が急激な変化を示すありさま、肉眼のスケッチによる詳細な様子など、さまざまな角度からハレー彗星に迫ってみました。この本が広く一般の方々にも受け入れられ、1985・86年の記念碑となるよう願って、各地の公共図書館が備えて下さることを希望しております。さらに、彗星現象を研究しようという専門家にも彗星のふるまい、全体から細部にわたって理解する上で役立てていただけるものと考

えております。

また我々は彗星の観測にすすんだアマチュアの力が絶対に必要であると信ずる立場から、この写真集が将来彗星研究に役立つ写真を撮影するときの指針にもなることを確信しております。

解説は本会特別会員、斉藤馨児氏が担当。斉藤氏は彗星をその核の本質から研究し天文学の見地から評論のできる数少ない専門家です。

出版は当初採算的に実現不可能と思われましたが、幸い東京大学出版会が企画化され、実現の運びとなりました。秋の年會に間に合わせるため現在作業を急いでおります。

題名：ハレー彗星をとらえた（1985-86年の写真記録）／版刊：東京大学出版会／概要：B5判、総アート紙184頁／定価：2800円。

会員諸氏に特別価格2500円（送料別）でお届けいたします。問合せ先：学会事務所、また秋季年會会場（高知）でも販売予定です。（庶務理事）